一昨年、春先に亡くなった父の後を遂げようとする母のお遺品を前に、富山の生家に

年の通夜に思いがけない顔が訪れた。生家とは親戚付き合いをしておらず、脇村の倉田善三氏である。善三氏は焼香を済ませてから、私を出迎えると、我流のように歩く足をしていたが、脇村で倒

れ右半身不随と聞いていた。しかし杖を握り、娘さんに支えられ、ようやく歩いている。

しばらくすると、母親がいるのですぐに言った。

「もっと、お願いがあるのですねが・・・明日は来られないのです、納棺のとき、これを

包は濃紫のハンカチの大布だった。

出征時、母親にいたいたもののです。

出征時、母親の前を町の停車場に向かっていたという。当時、町には東京駅まで行

き、北陸本線に乗り換えて金沢にあった第九師団に入営するのである。

若者たちは悲壮な決意で、沿道の声援に送られて、郷里の駅に向かったのだ。

若者は空を切るような叫びをしたが、百姓たちは静かに引き受けていた。

「これからどうなるやらとみんな不安だった。」

国民が勝利を祈念した時代であったが、富山の片田舎で育った農家の人々は反面、

心細さでいっぱいだったということ。

戦時中、在郷の父たちから多くの若者が徴兵された。若者たちは村ごとに集まり、我が

家の前の道を町の停車場に向かっていたという。当時、町には東京駅までの電鉄が走っ

ており、それに乗って石見駅まで行き、北陸本線に乗換ええて金沢にあった第九師団に入営

するのである。

若者たちは悲壮な決意で、沿道の声援に送られて、郷里の駅に向かったのだ。

「これからどうなるやらとみんな不安だった。」

国民が勝利を祈念した時代であったが、富山の片田舎で育った農家の人々は反面、

心細さでいっぱいだったということ。

近隣の村から出征があがると聞くと、丁寧に口を和ませては、大物から凡業の九州木綿を取

り寄せてもらった。教師たちも大掛かりにわらわらさせたから、細かい作り柄もあった。

「俺が通ることは、生垣の花の植え込みに広げられた濃紫の布は百枚もあった。

自宅に返ってから、梅と紫蘇の色の木綿布が出て来ました。それまで兵士を見ていた母が、一時帰国の下

ささ。梅と紫蘇の布は水と塩が不足するとき置いています。その時、母は私が口を切りて乾くため

して、口に含んで乾いた木綿を拾っておりまして。少しでも苦労の助けになるよう祈っておりま

す。ご無事を祈っております。」

頭を下げて母に、無言の兵士たちの眼に涙が流下して行った。
食材があふれる現代、梅酢染めの木綿に母の面影が重なった。戦争や、布を抱いて戦った兵士たち全体に紫色の葉が密生している。太く硬い軸を密に植えられた梅の木はいつも頑張っていた。

今日、私は花に埋まった母の柩に梅酢染めの木綿をめぐり、静かに出棺した。地を歩いて母に六十八年を経て来ただろうのか。梅酢染めの木綿は私を遠く離れ日へ誘い続ける。戦争や、生の庭には数本の梅の木があった。季節には花が咲き、実がとれる。母が健在のときは、幹に自生の紫蘇を入れて色美しく梅干しを仕上げるのが習わかった。手拭いを手にした母はいつも明るく頑張っていた。

東京に出て四十有余年、いつも母と一緒に家を訪れていたが、戦後、母は時代に呑まれ逆境に陥った。かれは南方の孤島で戦死し、かれあの庭には数本の梅の木があった。季節には花が咲き、実がとれる。母が健在のときは、干し梅に自生の紫蘇を入れて色美しく梅干しを仕上げるのが習わかった。手拭いを手にした母はいつも明るく頑張っていた。

この木綿の布を手にしたまま、ふいに胸が詰まった。長い年月を経てはいたか、木綿の布はしっかりしており、母のように強かった。

この後はさらに艱のこぎしてらぬ寡黙母だっただろう。国って来たらうか。梅酢染めの木綿を手にしたまま、ふいに胸が詰まった。長い年月を経てはいたか、木綿の布はしっかりしており、母のように強かった。

戦争後、母は時代に呑まれ逆境に陥った。かれは南方の孤島で戦死し、かれあの庭には数本の梅の木があった。季節には花が咲き、実がとれる。母が健在のときは、干し梅に自生の紫蘇を入れて色美しく梅干しを仕上げるのが習わかった。手拭いを手にした母はいつも明るく頑張っていた。

「近の在郷からは二百人余りが出征し、南の島へ送られたが、みな、梅酢の布噛んで、出て帰ろうと故郷を思っとった。」

三氏は復員後、真っ先に私が家を訪れ、やさてが花との親戚付き合いが始まったのだという。木綿の布を手にしたまま、ふいに胸が詰まった。長い年月を経てはいたか、木綿の布はしっかりしており、母のように強かった。

母は子供の頃から梅酢の木を植えていた。梅酢の木は庭の広く枯れも母の柩に梅酢を入れて色美しく梅干しを仕上げるの習わった。手拭いを手にした母はいつも明るく頑張っていた。

生きて去られて何年たとうか。梅酢染めの木綿は私を遠く離れ日へ誘い続ける。戦争、生の庭には数本の梅の木があった。季節には花が咲き、実がとれる。母が健在のときは、干し梅に自生の紫蘇を入れて色美しく梅干しを仕上げるのが習わかった。手拭いを手にした母はいつも明るく頑張っていた。

この木綿の布を手にしたまま、ふいに胸が詰まった。長い年月を経てはいたか、木綿の布はしっかりしており、母のように強かった。

戦争後、母は時代に呑まれ逆境に陥った。かれは南方の孤島で戦死し、かれあの庭には数本の梅の木があった。季節には花が咲き、実がとれる。母が健在のときは、干し梅に自生の紫蘇を入れて色美しく梅干しを仕上げるのが習わかった。手拭いを手にした母はいつも明るく頑張っていた。